

シブリッジ論争)

本稿では、資本ストックを用ひず、そのかわり自然(=資源)とから概念を用ひる。

つまり

$$Y = F(L, N, T)$$

N : 自然

仮定より自然は一定であるので

$$Y = F(L, T)$$

とする。

こ: て時間 T を固定した

$N = S$ の場合

時の $Y = F(L)$ を考える。

まず、労働投入量の集合 L を考える。労働投入量を

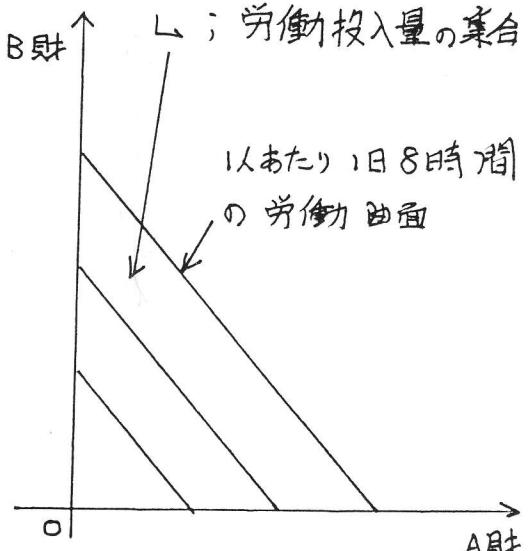
平均化された労働の労働時間

としこはかる。この時、

労働投入量の集合は IR_+^n 内の

点の集合とみまされ、右図

のように表わされる。この時、1人あたり1日の労働時間は、0時間から24時間までの値をとるが、肉体の再生産のため24時間労働と



いうのは無理である。つまり、最高は内体の再生産が可能な労働時間となる。今日では、労働運動の中ご一つのルール、例えば8時間労働等が形成された。(これは自由放任主義とは、若干質の異なるものである。) ここでは、8時間労働を最大労働時間としておき、一定期間に可能な労働投入量の集合 Γ の中に、平均化された労働の総労働時間が一定点を結んでできる曲面を考えると、総労働時間の大小により、「擬順序」が定義される。

つまり X_1 財, X_2 財, ..., X_n 財それぞれに投入された労働時間を l_1, l_2, \dots, l_n とするとき、

$$l_1 + l_2 + \dots + l_n = h$$

となる (l_1, l_2, \dots, l_n) の集合が作る曲面を考え、その合計(つまり h)の大小により「擬順序」を定義する。

次に七時の $F: \Delta \rightarrow Y$ を考える。集合 Δ は、一定期間に生み出される X_1 財, X_2 財, ..., X_n 財の生産量の集合である。 F は次の性質を満たすものとする。

I. 集合 L と \mathbb{R}^n 次元コンパクト多様体を集合 Y と \mathbb{R}^n convex な n 次元コンパクト多様体に写す同相写像である。

II. F は集合 L の「擬順序」を同型に集合 Y の中に生み出し、その「擬順序」は、
 $(0, 1) \ni t$ 及び、選択 2 点 $x, y \in Y$ に対し、

$$x \sim y$$

$$\Rightarrow (1-t)x + ty < y$$

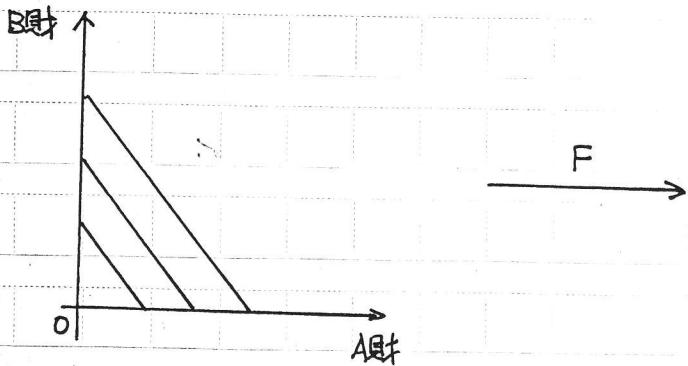
が成立する。

つまり、集合 L の中の平均化された労働の総労働時間が一定な点を結んでできること曲面を、同相写像 F により集合 Y の中に写した曲面が、concave であることを仮定する。

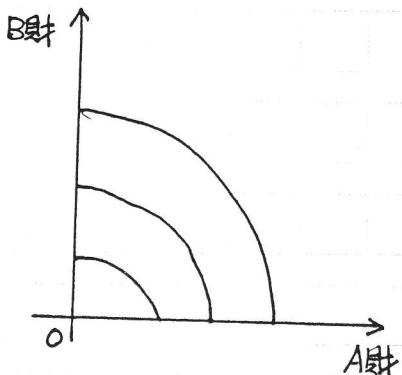
Ⅲは、自然の稀少性より尊かれたとのである。スケールメリットは無視していい。

$$\text{III. } F(0) = 0$$

凸 = 収の場合



労働投入集合 L



生産集合 Y.

5. 生産空間と消費空間の関係

ここで、労働の質に関する、ニコニペーターの「新結合の遂行」を考えてみよう。

ニコニペーターは、新結合の遂行による概念に五つの場合を定めている。

(1) 新しい財貨、すなわち消費者の間でまだ知られていない新しい財貨あるいは新しい品質の財貨の生産

(2) 新しい生産方法、すなわち当該産業部門において実際上未知の生産方法の導入

(3) 新しい経路の開拓

(4) 原料あるいは半製品の新しい供給源の獲得

(5) 新しい組織の実現

これらを実行する人間を、シウンペーターは「企業家」と呼んだが、本稿のモデルゴはこれらを労働の質の問題として取り入れる。つまり、労働を次の三つに分類する。

(1) 単純再生産労働（第一の労働）

(2) 生産性の向上により、生産集合Yを拡大させる労働（第二の労働）

(3) 今までにない効用を与える新たを出す生み出すことにより、消費可能集合を且次元コンパクト多様体から且+1次元コンパクト多様体に変化させる労働（第三の労働）

本稿ゴ特に強調したのは、第三の労働である。この労働が、本稿の経済発展の観方である多元的生産様式の深化を行う。

さて、自由放任主義的交換経済は、自我の完全な解放であると定義する：とがごまる。自我の完全な解放は、自由之定義するをもば。まさしく自由主義社会である。

しかし、自我の解放は、交換と媒介として、
自我の対立となる。競争社会である。強いて生
産自己消費の場合（近代経済学でよく例に出
されるコビニエンス・フルーソーの場合）にお
いっては、労働時間も含めて最大効用をもたら
すように生産・消費行動を行なう。しかし
自由放任主義的交換経済の場合、生産者及び
消費者それぞれの立場の中で自我の対立が生
じるばかりでなく、生産者対消費者という関
係においても自我の対立が生じる。生産者と
しては、他の生産者との利潤獲得競争において
、平均化された労働時間が個人よりも少ない
などることは、他の生産者に比べて自己の
利潤が少ないことを意味し、結局労働時間が
最大労働時間にならざるを得ない。また、消
費者としては、生産者が失業しようがすま
が、自らの一定期間の効用（生産者の労働時
間を考慮しない）を最大化する行動を行なう。
まさしく、効用物を中心において生産者と消
費者が、その構成員が同じ人間であるとする

事実にもかかわらず、分裂し相対しているのがある。

このようにして、自由放任主義的交換経済の場合、労働時間は労働投入量の集合 Γ のバウンドリー上、つまり最大労働時間の面に定まる。そして、それは関数 F により、生産集合 Υ のバウンドリーである $\Pi-1$ 次元コンパクト多様体($\partial\Upsilon$)上に写され、ここで生産が常に決定される。それに対し、消費行動は消費可能集合 S の任意の点で決定される。つまり、生産は $\Pi-1$ 次元コンパクト多様体上で決定されるのにに対し、消費は Π 次元コンパクト多様体上で決定される。この次元の差が、自己生産自己消費の場合、つまり生産も消費も Π 次元コンパクト多様体の任意の点で決定される場合との、決定的矛盾を与える。

自己生産自己消費社会の場合、第二の労働（つまり生産集合 Υ を拡大させる労働）が行われ、生産集合 Υ が、消費可能集合 S の最大効用点 s_0 （内点に含むようになった時）でも、

著者 泉 宏明

住所 〒739-0145 広島県東広島市八本松町宗吉 92-5

HomePage

http://www7a.biglobe.ne.jp/~popuri_art/izumi/

copyright©2012 泉宏明 all rights reserved.